

ツォンカパの人間観

根本 裕史 (広島大学)

要旨

チベットを代表する仏教思想家ツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357-1419) は、インド仏教の伝統的な無我説やチベットのサンブ・ネウトク僧院で発達した述定理論の観点から人間存在を分析し、最終的には中観帰謬論証派の空思想に立脚し、固有の存在性を欠くものでありつつも幻 (sgyu ma) のように意識に顕れる人間のあり方を精緻に考察している。

ツォンカパによれば、仏教の諸学派に共通の無我説とは「五蘊とは異なる特質を持つ独立自存の実体 (rang rkya thub pa'i rdzas) としての我 (bdag) はどこにも存在しない」という考えのことである。五蘊を支配する我というものは存在せず、人間とは蘊の集合体 (tshogs) もしくは連続体 (rgyun) に基づいて概念設定された仮設有 (btags yod) に他ならない。述定理論の観点から言えば、「人間」は「～は人間である」という言明における賓辞 (mtshon bya) であり、その賓辞を受ける主辞 (mtshan gzhi) となり得るのは識 (rnam shes) である。

毘婆沙師・経量部・唯識派・自立論証派は「～は人間である」という言明の主辞となるもの (意識、アーラヤ識など) が実在することを主張するが、中観帰謬論証派は「～は人間である」という言明の主辞に対応する事物がそれ自体では存在し得ないことを説く。ツォンカパの註解によれば、帰謬論証派にとって人間とは言語表現に関わる知 (tha snyad pa'i shes pa) に依存してはじめて成立するものに過ぎず、言語表現に先立って、自己に固有の存在性 (rang bzhin) を具えるものではない。人間とは無自性なるものである。

しかし、他方でツォンカパが『菩提道次第大論 (Lam rim chen mo)』で強調するのは、そのような無自性なる人間こそが、業を積み、その果を享受する担い手となるという点である。正理知 (rigs shes) によって分析すれば、「～は人間である」という言明の主辞はどこにも見出されないにもかかわらず、あたかも幻のように我々の意識に顕れる人間が存在し、まさにその人間が業を積み、苦しみを経験する。ツォンカパが説く「幻のような人間」とは、空性を直観する三昧から出定して後得智を得た聖者 ('phags pa) の認識に顕れる対象である。人間に対するこのような認識は、空性を正しく理解した聖者のみが持ち得るものである。

本発表では、上記のようなツォンカパの人間観について考察し、特に人が「幻のようなもの」として顕れる仕方 (sgyu ma lta bur 'char tshul) をめぐる彼の議論を分析し、その思想的源泉をインド仏教文献・初期チベット仏教文献に探ることにする。

[キーワード] チベット仏教、ツォンカパ、中観、幻